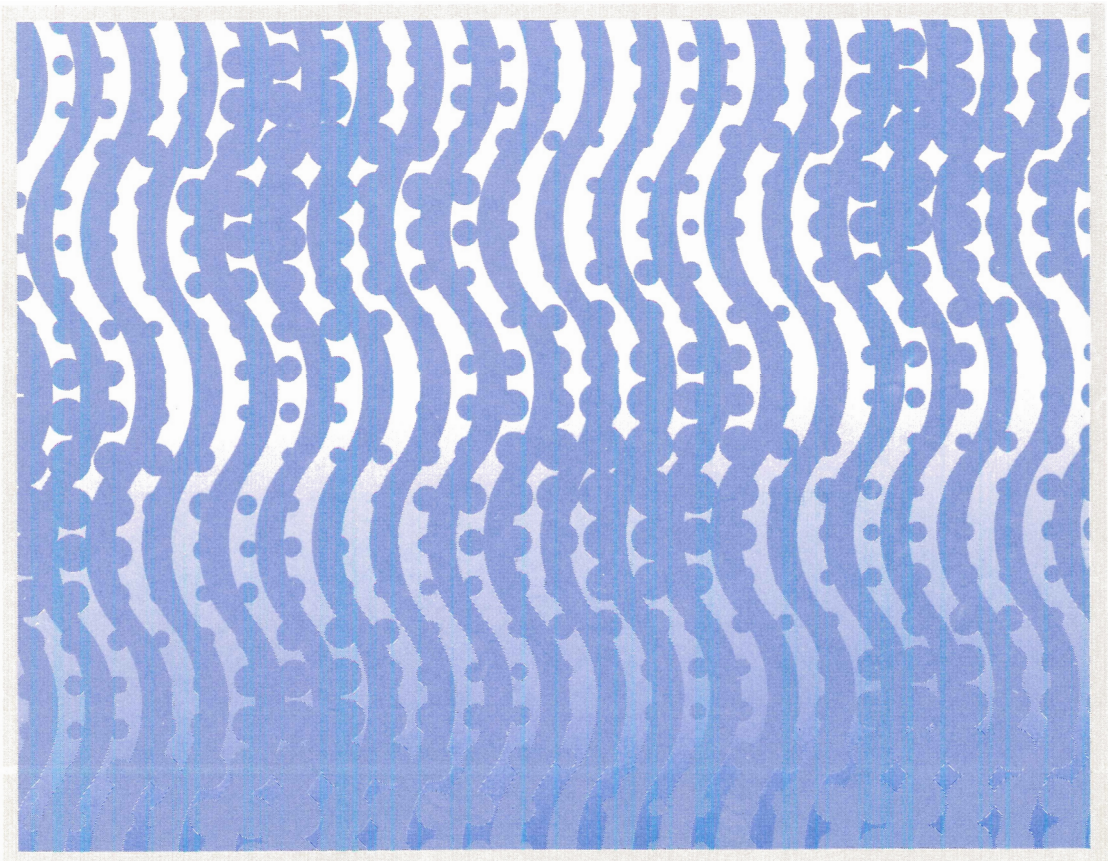


そるえんす



No.31

— 目次

巻頭言	1
ヨーロッパ塩業をかいま見る	2
北方領土・千島訪問記	9
素っ気ない	23
校歌と久米通賢と塩田小唄と	27
塩漫筆 米塩	30
平成9年度助成研究を募集	32
財団だより	34
編集後記	

米と油と土地



水野 勝

日本たばこ産業(株)
代表取締役社長

戦争が終って直ぐの頃、米を始めとする深刻な食糧不足で、数百万人の餓死者が出るのではないかと報道がされた。実際には、配給食糧しか口にできなかった裁判官が栄養失調で死亡したという話題はあったが、大量に餓死者が続出する事態にはならなかった。しかし、大規模な食糧不足が報ぜられると、農家は目一杯抱え込むし、消費者はあらゆる手段を講じて買い漁り、買い溜めを行ったから、大量の食糧が表の世界から姿を消した。広い範囲でヤミ取引が行われ、ヤミ価格は暴騰した。

昭和40年代の終りに、オイルショックが起きた。OPECが原油の価格を一挙に5倍ぐらいに引き上げた。日本に対しては、端的な供給制限が行われたわけではなかったが、石油、石油製品の値段は急上昇するとともに、売り惜しみ、買い占めが横行した。事実上、大型石油タンカーが続々と日本に向けてインド洋を航行していたというのに、トイレットペーパー騒ぎまで発生した。

昭和60年代の初め、土地関係の当局者が、「関東地区では、霞ヶ関ビル並みの商業ビルが175棟不足することになる」と述べた。地価が大幅に急騰し

たが、やがてバブルは無残にも崩壊した。不動産金融の破綻に続いて、住専問題が発生した。

品不足、供給不足が報ぜられると、俄然、その商品の価格が急上昇するとともに、その姿は市場から消え、地下にもぐってしまう。それは、統制物資であっても変りはない。食糧庁、国土庁などなどの立派な所管官庁があっても同じことである。そして、大きな社会的、経済的混乱につながってゆく。

塩は、生活に欠くことのできない重要な物資である。これまで90年以上にわたって、専売物資になっている。この間、戦争や石油危機があっても、大きな混乱もなく推移してきた。塩は物価の優等生であるといわれてきている。これは、専売制度という枠組みもさることながら、関係者のなみなみならぬ努力と優れた智慧によるものといえる。

来年3月をもって、専売制度は幕を閉じる。この場合、制度は終るが、これを適切に支えてきた関係者が今後の枠組みを動かしていくことには変りはない。永年にわたって培われてきた関係者の叡智によって、塩の供給と価格の安定は、着実に確保されてゆくものと考えられている。



ヨーロッパ塩業を かいま見る

尾方 昇

平成8年9月7日から約2週間ヨーロッパの塩業訪問をする機会をえた。今回の訪問の動機は、約7年間早稲田大学の豊倉賢教授を中心に、食塩結晶粒径制御を主課題として進めてきた日本海水学会の晶析研究会が成功裏に終わり、国内製塩工場で粒径制御技術ができあがったことを記念して、国際会議にその成果を発表し、併せてヨーロッパの製塩工場を視察しようという計画から出発した。

一方以前からヨーロッパの製塩工場が優れた管理をしていることをきいていた日本塩工業会技術部会では、この機会に同行して実際にこの目でみたいという要望があり、15名の大きな団体で参加することになった。全体では晶析国際会議に参加する大学の先生を中心とする13名の方がおり、前半部分は28名の団体でスイス、ドイツの塩業視察およびドイツで開かれた晶析国際会議出席、後半は別れて、日本塩工業会だけのグループでフランス、オランダの塩業視察、先生方はフランスで開催される国際会議参加ということになった。

前半部分はすべて早稲田大学の豊倉賢先生がアレンジされ、平沢先生は現地のお世話にと大変な

ご苦勞をいただいた。まずは先生方に厚く謝意を表したい。日本塩工業会メンバーの日程は次の通りである。

日程 平成8年9月7日～21日、15日間

- 7(土) 東京→チューリッヒ
ホテルでWelcome Drink,
Dr. Kratz & Mrs. 出席
- 8(日) 結団打ち合わせ(メンバー紹介、事前内容説明、分担打ち合わせ、等)
ゴルナグラート、マッターホルン展望台
- 9(月) ラインザリーネン工場訪問(バス)
- 10(火) Sulzer Chemitech 訪問(バス)
夜招待ディナー
- 11(水) チューリッヒ→ブレーメン(鉄道、空路)
- 12(木) 国際晶析会議参加
- 13(金) ベルンベルグ工場訪問(鉄道) 終了後
ツールーズ国際会議参加組と別れる
- 14(土) ブレーメン(バス)→ハンブルグ(空路)
→ワルシャワ(鉄道)→クラクフ
- 15(日) ウェリチカ塩博物館訪問、

- クラクフ（空路）→ワルシャワ
- 16(月) バスで市内視察後ワルシャワ（空路）
→パリ
- 17(火) バスで市内視察後パリ東駅（鉄道）
→ナンシー
- 18(水) バランジェビル工場訪問、ナンシー
（鉄道）→パリ（空路）→アムステルダム
- 19(木) デルフォサイル工場訪問
- 20(金) フリータイム後ホテルで総合討論、
アムステルダム（空路）→
- 21(土) 東京着



シュバイツハレ工場(スイス)のゲストハウス

1. スイスのラインザリーネン社

日本塩工業会としては1994年に続いて2度目の訪問である。前回訪問の紹介は『そるえんす』No.24に掲載されている。前回はシュバイツハレ工場を訪問したが、今回はリーブルグ工場を併せて見学した。今回はスルザー社のクラッツ博士が案内役で、工場関係者はリバヘル社長が最初に挨拶するだけになった。

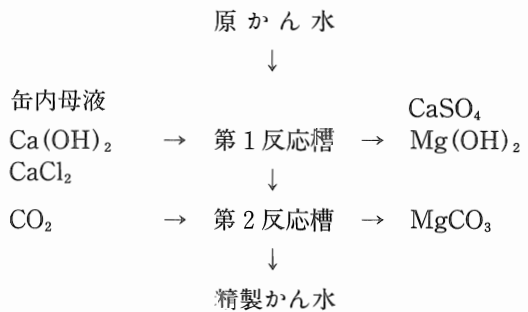
EC経済圏では専売制が認められておらず、スイスの塩専売制もしばしば問題になったが、イタリアなどととも、数少ない専売制が残る国である。専売制といっても生産、輸出入だけで、流通過程の専売制はとっていない。基本的運営方針や蔵出価格は、各州の代表者から構成される委員会決定される仕組みで、中央官僚の決定ではないから、民主的といえるかもしれない。

ラインザリーネン社は、シュバイツハレとリーブルグの2工場があり、生産能力はいずれも約20万トンだが、シュバイツハレ工場は、管理部門、メンテ工場、食用塩の包装工程を持ち、リーブルグは業務用、道路用が主体になっている。シュバイツハレ工場に着くと工場前のラインの流れに沿って緑に囲まれたゲストハウスに案内された。大変立派なもので日本の塩業者はまず驚かされる。

両工場ともに加圧式で、シュバイツハレ工場は標準型6缶、リーブルグ工場は外側加熱1缶であ

る。リーブルグの蒸発缶はダブルの加熱缶をもっている。コンプレッサーはシュバイツハレで4.4MW+2.2MW×2の3台、リーブルグは4.4MW×2台である。蒸発缶はモネルだが大変に古く、シュバイツハレはすでに30年を経過している。

かん水は消石灰、ソーダ灰によるカルシウム、マグネシウムの除去が行われ、かん水pHは10以上である。



連続運転時間は比較的短く、週末、夜間などの運転停止が多いようである。これは需要に比較して生産能力が大きすぎること、労働条件、電力単価の変動などから行われているようである。

蒸発缶が長く使えるのは、このようなアルカリ環境下で使用していること、運転時間が短いこと、全モネルで異種金属腐食の問題が少ないこと、全系列は屋内でストリップ部分がないこと、などが大きな要因ではあると考えるが、基本的に機器を

大切に管理し、環境を美しくする熱意が根本にある。工場や事務所に裸配線もなく、パイプラインも整然としており、掃除が行き届いており、メンテに対する感性が一味違っている。

2. K&S社ベルンベルグ工場

ドイツで本年完成したベルンベルグ工場を訪問した。ここもスルザー社クラッツ氏の案内で、工場側からはバージ副工場長の紹介があっただけである。スルザー社のガードがかたく実質的に工場見学らしいものはほとんどできなかった。この工場の紹介は日本海水学会誌50巻1号に二宮氏が紹介している。

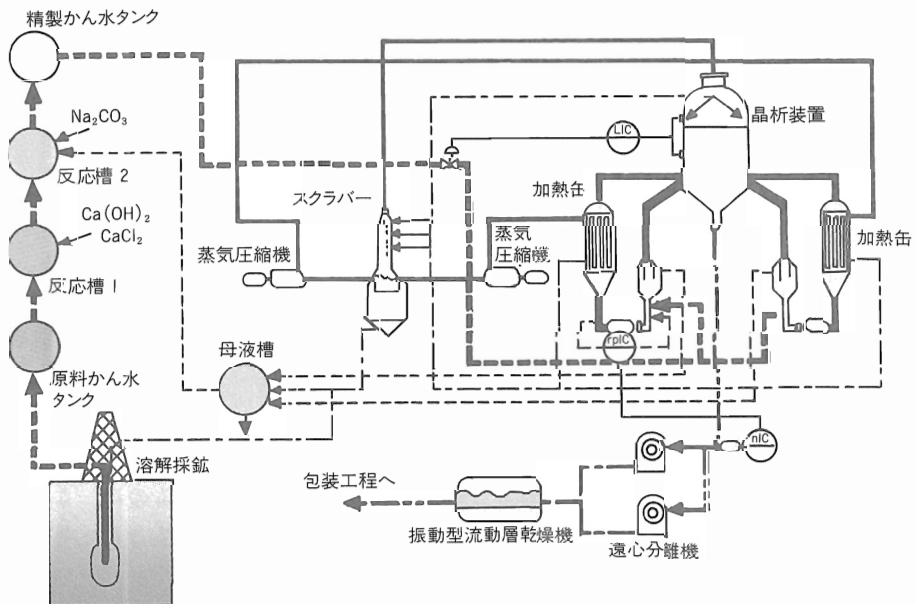
工場は有名なスタッツフルト岩塩鉱の近くにあり、旧東ドイツ領域である。生産能力は35万トンで缶の形式はリーブルグ工場と近似している。まだあちこち手を入れているような状況である。蒸発缶は1缶、加圧式のモネル缶である。リーブル

グ完成から約20年を経過しており、その間の大きな進歩は加圧タービンの改善にあった。完全自動化を標榜して建設されておりコンピュータ制御が入っている。しかしまだ安定操作の状況にはなっていないようである。

加圧式蒸発缶は1缶で大量生産が出来るメリットが十分生かされている。多重効用缶に比較すると缶の数が少なく、制御も容易で、蒸気比容積が小さいので蒸発缶や配管も小さくてすむ。製品品質も一定のものを大量に作るには具合がよい。スイス、ドイツ、フランスは加圧式を使っている。もちろん日本ではイオン交換膜法なので加圧式は適当ではないが地域によってはメリットがある。

3. MIDI社バランジェビル工場

MIDI社はフランス最大の塩メーカーであり、フランスの塩生産の65%のシェアをもっている。MIDI社はフランスの製塩企業が大合併して作ら

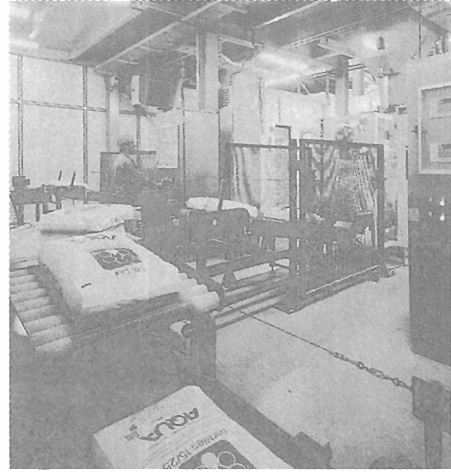


K&S社(ベルンベルグ工場)のフローシート想像図

((財)塩事業センター海水総合研究所 長谷川正巳氏提供)



バランジェビル岩塩鉱山(MIDI社パンフレットより転載)



バランジェビル工場包装室(MIDI社パンフレットより転載)

れ、フランス国内の独占的地位を確立した。ベルギーのソルベ社が一部侵入して約20%のシェアを持っているが、独占的地位は変わっていない。また旧フランス領のチュニジア、モロッコ、マダガスカルなどに子会社を持っている。今回の訪問はパリの東にナンシーという町があり、その東約15kmにあるバランジェビル岩塩鉱と溶解採鉱によるかん水のせんごう工場である。

岩塩鉱は生産量20万トン/年、地下約100mから下に60mの塩層がある。下層ほど純度が高い。そこをルームアンドピラー法で採掘している。ピラーは30m角、ルームは13m幅、高さ4.5mになっている。すでに採掘した鉱床は0.6×3kmになっている。岩塩鉱の下部をチェーンソーで切って15cmの空間を作り、壁面にドリルで穴をあけそこに硝酸アンモニウムを充填して爆破し、ショベルカーとベルトコンベアで運ぶ。爆破は毎日正午に行われる。

3回サイレンが鳴り、従業員が退避する。恐らくその間が食事時間なのだろう。フランス人は食事が長いという印象があるが、食事時間は30分と

いうことで、仕事中の食事は短いのかと再認識した。岩塩は粉碎され大形のふるいで分級される。0.6mm以下の塩が15%以下というのが規格らしい。

せんごう工場は生産量55万トン/年、約10km離れた採かん井戸から供給されたかん水をせんごうしている。外側加熱の加圧缶+標準型4缶と外側加熱の2缶で5重効用となっている。今年7月に標準型4缶を外側型2缶に切り替え更新して、熱効率なども向上したとのことだった。新しい蒸発缶はモネルクラッドとチタンの組み合わせであり、世界的にモネルクラッド+チタンが一般的になったのだなと感じた。

スイスのようにピカピカに床を磨いたりしてなくて、雰囲気は日本に似ているのかなと一寸親近感を感じさせる。包装工程はやや仰々しい。なお岩塩鉱、せんごう工場の詳細はMIDI社の案内が「海外製塩企業のパンフレット22および23(平成8年11月8日)」としてJT塩専売事業本部塩技術調査室で翻訳していただいております、詳細に説明されています。

工場長は今年ISO9002の承認を得たことを大い



デルフォサイル工場訪問の視察団一行

にアピールしていた。これでECを含めた輸出に大きな力になるとのことで、輸出意欲は強いようだ。もう一つは労働条件で、従来争議が絶えなかったが、労使委員会を充実させて最近は順調に運転できるようになったらしい。

4. AKZO社デルフォサイル工場

アムステルダムから海岸の大堤防（ダイク）を通り、オランダの北の端にあるデルフォサイル工場を訪問した（日本の地図にはデルフジールと書かれていることがあるが、これは全然発音が違って通じない）。AKZO本社からピアマン社長がわざわざお迎えにこられた。案内は工場長プリンス氏、ギューツ技師長らである。AKZO社もオランダ製塩企業5社が合併して独占市場を作った会社である。今ではアメリカ市場1,000万トン、ヨーロッパ市場で500万トンを生産し世界最大の塩メーカーである。

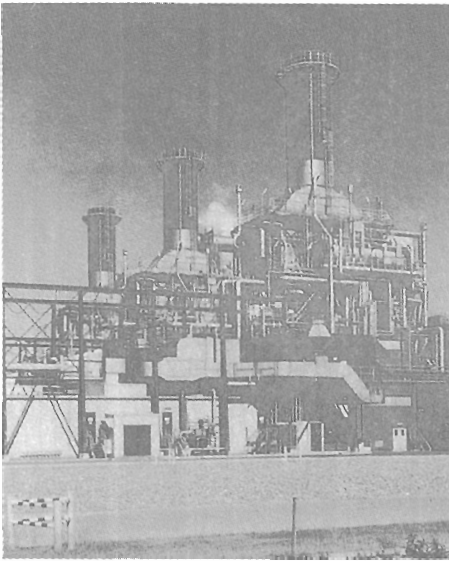
デルフォサイル工場は散塩専門の200万トン工場、4重効用缶3系列があり、3つの製塩工場が1カ所に集まっている感じになっている。蒸発缶はすでに30年を経過しているが管理は非常によ

い。3年に1回数日間の定期点検を行うが、それ以外は完全に連続運転となっている。主としてロッテルダムの自社工場に船輸送しており、乾燥機も、包装工程もない。

隣接して発電工場がある。ここから電気、蒸気の供給を受ける。天然ガスを燃料としてガスタービン発電を行っている。発電所は200MW、蒸気500トン/hだが、非常に小さい。石炭ボイラーを見慣れていると、貯炭場、粉碎器、排気処理設備などがなくて、こんな小さなもので200MWということではびっくりする。120KWは周辺地域への電力供給に使われている。

地下に塩層と天然ガスがあり、海岸に立地しているのも、条件が余りにもよくて、これではとてもかなわない。ピアマン社長が2003年の経過期間終了を楽しみにしているとの発言があり、私は、1,500万トンの巨人が20万トンの小人を食べにくるのは是非やめていただきたい。将来もコンペティターではなくフレンドシップでおつきあいたいという、いやいや小人とは謙遜でしょう、JTと7社が協力して国内塩を守ったのは並の力ではないよという皮肉が返ってきた。

AKZO社は社会的責任を基本に運営するのがポリシーとっており、自然保護、環境問題、政府



デルフォサイルの発電プラント(200MW)
(AKZO社パンフレットより転載)

協力などは積極的に進めていることを強調していた。無理な進出はしないということだろうか。

5. 雑感

① 今回の一つの目標はブレーメンの国際晶析会議に発表することだった。

業界からの発表はナイカイ塩業の正岡さん、新日本の江原さんが発表された。国際舞台で英語で発表することは度胸もいるし、勉強もある。恐らくたいへん勉強になったのではないだろうか、業界の若手がこういう場で自信をつけていくことは、これからの社会の中では非常に有益なように思われた。

② ヨーロッパと日本の製塩の最大の違いは、ヨーロッパでは岩塩、溶解採鉱が主体であり、天日塩が一部あるという状況だが、日本はイオン交換膜による採かんを行っていることである。

岩塩では縦坑を掘りそこから地下を掘り進む。この作業はハンドリングがかなり大変であり、それほど簡単なものではない。しかも内陸にあって

陸送距離が長い。品質上そのまま食用にはできない、などを考えると食用塩主体の日本塩業にとってそれ自体が大きな脅威ではない。溶解採鉱はボーリング、パイプライン設備などの問題はあるものの、飽和かん水から日本と同じような結晶缶設備で製塩し、精製塩クラスの塩を作っておりコストも安い。安心してはいられない。

③ せんごう面の違いで大きなものは、ヨーロッパでは加圧式が多いこと、粒径制御がなされていないことであろう。イオン交換膜方式は多くの電力を必要とし、日本では買電単価が高いという条件を考えると、日本に加圧式が入る可能性はない。粒径制御は晶析技術としては日本の誇れる技術だが、特例塩制度が生んだ日本の特殊技術ということができよう。価格問題を離れて技術的に粒径制御技術が生きる用途がどこまであるか今一度考えなくてはならないだろう。

④ 工場を概観すると蒸発缶がストリップになっているところがなく全部立派な建屋に入っている。包装工程は人が少ない。応接室、ゲストハウス、職員食堂が立派なこと、荷物リフトより人のリフトが立派に整備されている、などが目につく。これらは現在日本で進められている合理化努力とは少し違うところに視点があることを感じさせる。

⑤ ゲルマン人、ラテン人、日本人それぞれに独自の文化や感覚がある。スイスやドイツでは露出配線はどこでも見ることがない。電柱がなくて地下配管や埋め込みになっている。広告看板が少なく町の美化に市民の協力が得られている。100年も200年もかけて文化財の修復をやる。

工場内を美しく保つことに大変な努力をしており、それが当然のことになっている。蒸発缶の周りをモップ掛けしているのを見たりすると愕然とする。こういうのを見ると日本人は美しくすることにはあまりコストをかけないし、熱意がないように思えてしまう。

⑥ 若干言い訳になるが、外国に行ってもお土産に買うものがなくなった。日本には運んでくれるものは皆輸入販売されていて、日本の豊かさと世界が狭くなったことを再認識する。しかし外国に



オランダの大堤防

行くと日本に運んでこれないものが沢山ある。景色、日本人とは違う生活態度や考え方、こんなものは土産にしようがない。

料理にしてもフランスの大衆料理はフランスでなくては味わえない。外国に行ったら高級料理もよいがやはり大衆料理を食べた方がその土地の味がする。ムール貝のワイン蒸しは5個か10個きれいに並べられた日本のフランス料理高級店より、バケツのようなポットに入ったのをムシャムシャやる方が絶対うまい。

⑦ 工場訪問以外で印象的だったことを少しかだけ紹介すると、マッターホルンの展望台に当たるゴルナグラートに列車で上がった。途中からは自動車は一切禁止である。今回列車利用が多かったが、黒部のトロッコ電車をメチャ規模を大きくしたような絶景で早起きして行った甲斐があった。ウエ

リチカ岩塩鉱博物館、ここは世界文化遺産になるだけの価値がある。言葉では表現できない。すごい。ちょっと不便だが塩を仕事にしているここを訪問できたのは幸せだった。

ワルシャワで夕食をしたレストランでワルシャワ工科大学のダンスクラブOBのマズルカのショウは圧巻だった。オランダの大堤防(ダイク)を通過してデルフォサイルの工場に行った。オランダ人のすざましい汗と意欲に圧倒される想いだった。オマケとしてあちこちのホテルにカジノがあった。一人を除くとどうも収支はマイナスで国際貢献をしたらしい。

⑧ 今回の反省点の一つ、MIDI社に訪問のお願いをする際、英語で手紙を書いてもなかなかOKの返事がこない、フランス語で手紙を書いたらすぐに丁寧な招待状をいただくことができた。これは1994年イタリア訪問でも感じたことだが、西欧のビジネスマンという皆英語ができるような錯覚を持ってしまう。お願いするときはその国の言葉でなければ見てくれないし、失礼だということをつくづく反省した。これは日本人は漢字を使っているから中国語がわかるはずという錯覚に似ている。

しかし旅の中で言葉の問題では恐れることはない。皆さんの買い物を見ると下手な英語より日本語の迫力の方がよほどうまく行くのをしばしばかいま見た。

(旧)日本塩工業会 理事・技術部長)

北方領土・千島訪問記

——北方四島交流推進全国会議訪問団に参加して——

三上 洋一

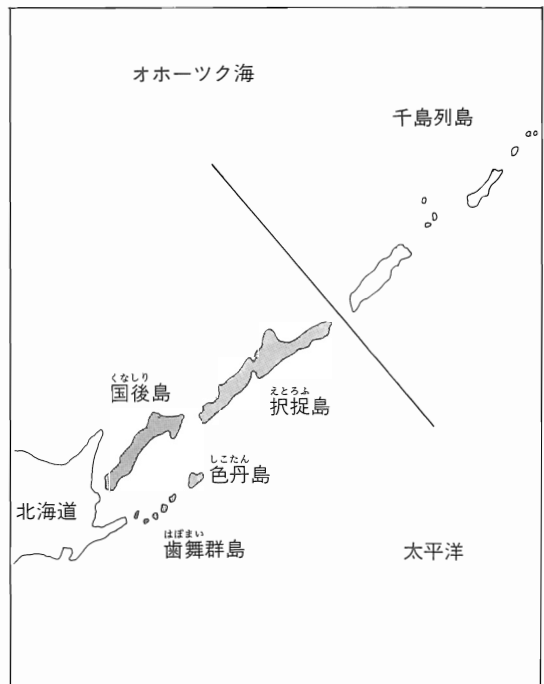
◇はじめに◇

本誌No. 25で、往時の千島・択捉島の生活を紹介したが、今回、幸いにも交流団に参加し、千島の色丹島と択捉島を訪問することができた。49年ぶりに上陸し、見聞した故郷・千島の現状を綴ってみたい。まず、話の順序として、参加した「北方四島交流団」とは何か、その辺りの紹介から始めることにしたい。

◇北方四島相互交流をめぐる経過◇

趣 旨：北方四島相互交流は、領土問題の解決を含む日ロ間の平和条約締結問題が解決されるまでの間、相互理解の増進を図り、領土問題の解決に寄与することを目的として、日本人訪問団と北方四島に居住するロシア人訪問団により行われる相互訪問である。この交流を通じて、北方四島の住民の方々に北方領土問題の歴史的経緯、日本の主張の正当性を伝えるなど、北方領土問題の解決につながるようなものを醸成するのが目的であるとされている。

北方四島を訪問できる者：元居住者（子、孫、これらの配偶者を含む）、北方領土返還要求運動関係者および報道関係者。



北方四島

主な経過：平成3年（1991年）ゴルバチョフ大統領の訪日時の日ソ共同声明の中で、日本側住民とロシア側現島民との交流の拡大、日本国民による四島へのビザなし渡航の枠組みについて言及された。同年10月、北方四島との交流に関する外相間往復書簡が交わされ、それを受けて、政府は閣議了解（「我が国国民の北方領土への訪問について」）により、四島訪問の枠組みと手続きが決定された。

平成4年（1992年）2月に、四島交流の推進組織として「北方四島交流北海道推進委員会」（北海道総務部北方領土対策本部内）を設置。翌年（1992年）には、全国的（青森県以南）な組織として「北方四島交流推進全国会議」（特殊法人北方領土問題対策協議会内）が設置された。

実際の交流は、北海道推進委員会による1992年4月の四島在住ロシア人の招聘をもって始まった。1993年からは、推進全国会議による交流も行われている。

ちなみに、ビザなし交流の訪問実績は今年9月までで約1,800人である。ロシア側からの来訪は1,750人で、北海道のみならず東京都、宮城県、神奈川県、富山県、千葉県、秋田県などの全国会議の地方組織が現地受け入れを行っている。

さらに、平成5年（1993年）10月には、エリツイン大統領訪日時東京宣言において、四島交流の一層の円滑化を初め、相互理解の増進へ向けた一連の措置を採ることが言及されている。

日本政府の立場と考え方：北方四島は歴史的にも国際法的にも日本固有の領土であり、その返還を求める日本国民の世論は、非常に強い。四島に対する「日本の主権」がロシア政府によって確認されるならば、実際の返還の時期、態様及び条件については柔軟に対応することが日本政府の立場である。

「現在、北方四島に住んでいるロシア人が、かつての日本人島民と同じような境遇に置かれることを私たちは望まない。それらのロシア人の人権、利益及び希望は返還後も十分に尊重される」と日

本政府は明らかにしている。

◇参加申し込みから出帆まで◇

参加決定まで：昨年8月末、北海道庁職員の弟は道主催の交流団に参加したが、時化のため上陸出来ず、ただただ船酔いの人を介護して帰港した。この時期オホーツク海は、しばしば大荒れに荒れるのである。300トン以上の船が接岸できる港はほとんどないから、沖合に停泊し、艇（はしけ）移乗ができる天候でなければ上陸もできない。その時、再参加の権利を与えられたので、来年は兄弟揃って千島に行こうと電話してきた。

今年（1996年）1月に、（社）千島齒舞諸島居住者連盟から案内があり、私と弟は風の多い7月に択捉島上陸を希望する参加申し込みを行った。

待望の通知は6月初旬に届いた。兄弟で、全国会議主催の交流団に参加するため、7月17日夕方に根室市の千島会館に集合した。

団員の顔触れ：北方四島返還運動全国組織には各県に県民会議などの下部組織があり、そこからの参加者が20名、国会議員（沖縄及び北方問題に関する特別委員会委員）2名、大学教授（北方問題専門家・北方問題対策協会顧問）1名、新樹会（NGO・人道援助団体）2名、総務庁1名、外務省1名、医師1名、北海道新聞2名、北海道放送3名、通訳4名、本訪問の世話係をして下さる北方四島交流推進全国会議事務局4名、そして元島民とその家族は7名で、合計48名であった。

私は元島民の数があまりに少ないのに驚いてしまったが、元島民の大部分は北海道に在住しており、道主催の訪問が数の上でも多いのだから、返還運動の全国的盛り上がりと継続を意図するのであれば、全国会議としてはこのようなメンバー構成こそふさわしいのかも知れないと、後々思うようになった。

実際、県代表の中には、既にロシア側訪問団を受け入れたりと、これから受け入れようとする方々

もおられたのである。また、年齢は20から70歳で、職業も町長、中学教頭、最上徳内記念館学芸員、会社経営者、農業経営などさまざまで、また女性も10名おり、多彩であった。

結団式と研修：こんな団員構成であったから、7月17日の結団式の後に、当然研修が必要であった。まず午前中、根室半島の突端・納沙布（のさっぷ）岬にある北方館・望郷の家を見学した。北の珍鳥・エトピリカ（アイヌ語で美しい鳥という意味）の剥製を見ていると、誰かが近づいてきて「地図に三上さんの家が載っているようだ」という。

行ってみると、町内会の案内板のような形式で『択捉島留別（るべつ）小学校通学区域図』が作成されており、私は自分の家はもちろん、懐かしい村の各家を確認することができた。

午後は千島会館で研修となり、交流事業の経緯、訪問日程と留意事項、往時の千島の様子、領土問題と日ロ関係、交流体験談、ロシア人の民族性とロシア語などを聴講した。

しかし、全講師の中で、ユーモアを交えながら

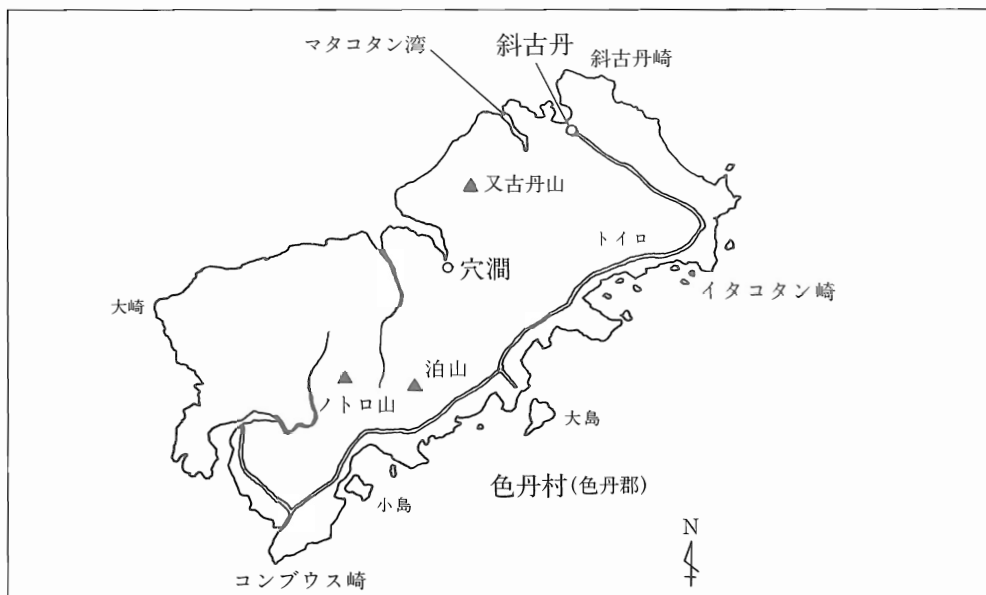
も一番強烈だったのは、チャーター船『コーラルホワイト（354トン）』の船長の次の言葉だった。

「外海に出ると残念でしょうが外国です。その代わり、船内では酒類は無税になり安くなります。大いに楽しんで下さい。ただくれぐれも船から落ちないで下さい。10ノットの走行ですが、気が付いて直ぐ引き返しても、30分はかかります。7月とはいえ海水はまだ冷たく、たいていの方は心臓麻痺で死んでしまいます」

花咲港（はなさきこう）出港：出発に際して、岸壁前の広場で総理府長官、道知事、根室市長、千島歯舞居住者連盟理事長などの挨拶が次々とあり、民間外交というのはもっと自然で気負わないのが良いのではないかと戸惑った。

うれしかったのは、前夜、49年振りに再会を果たした択捉（えとろふ）島・留別（るべつ）小学校の級友・正ちゃん（佐藤正二氏、根室市在住）が「大丈夫、帰りまで風だよ」と請け負って、根室の銘酒『北の勝つ』を2升も差し入れてくれたことであった。

船は17時に出港し、油風の海を滑るように進ん



しこたん 島
色丹島

だ。二段ベッドが狭い通路を挟んで向かい合う形式の小部屋に、各人が荷物を入れ込んだ。皆に声をかけ、エントランスホールに車座になって座った。紙コップに差し入れの酒を注ぎ、無事な船旅を祈って乾杯した。

『北の勝つ』か、こういうときにぴったりの、いい名前だなあ」と誰かが言った。

船は23時に国後(くなしり)島古釜布(ふるかまっぶ)港に停泊した。この港内で、明朝早く、最初の訪問地へ向かう前に、北方領土への到着事務手続きを済ませるためである。ここから、生活はサハリン時間ですることになった。ちなみにサハリン時間は、日本時間より通常2時間早い。この時期はサマータイムなのでさらに1時間早く、時差は3時間であった。従って、船内の朝食は7時、つまり日本時間の4時からとなったのである。

◇色丹島訪問◇

上陸と歓迎：7月18日朝、船は霧に包まれた湾に入った。色丹島(しこたんとう)・穴澗(あなま)というこの村の日本名が、深い入り江になった天然の良港の地形をよく表している。

古びた板張りの栈橋の上で、20人ほどの島民が手に手に野の花を持ち、にこやかな笑顔で出迎えてくれた。その中に一人、民族衣装で正装した女性が、大きなパンと塩を持って立ち、その後には子供が一人、小さな木箱にコインを入れて持っていた。私たちは「スパシーバ(ありがとう)」と言って花を受け取り、パンをちぎって塩を載せ、口に含むと、一枚のコインを渡された。

これが「村へあなたがたを喜んで受け入れます」という、ロシアの伝統的セレモニーであった。行政府表敬訪問の会場は公会堂で、壇上の壁に「ロ日両国民の友好を強化せよ」と両国語で書かれた横断幕が懸けられていた。色丹島の最高責任者であるブイコフ副地区長(国後島・色丹島で南クリル行政地区をなし、地区長は国後にいる)は「尊敬する日本の皆さん」で始まる伝統的なロシア式の挨拶をしたが、実直そうな人柄で、一生懸命気を遣っているのがよく分かった。

地震の爪痕：道路は舗装がなく、ところどころ荒れているので、乗せられた車は溝の深いタイヤをつけていた。色丹島は、1994年10月4日の北海道東方沖地震(マグニチュード8.1)で、四島のうち最も大きな被害を受けた。復興は極めて遅く、



「野の花を持って迎える人々」
しこたんとうあなま
色丹島穴澗の栈橋にて 左中央のロシア民族衣装の女性はパンと塩を持っている



行政幹部訪問。色丹島穴澗公会堂にて
 (左から) ゼムコーワ総務部長、ブイコフ副地区長、ベルグ穴澗村長
 飯野訪問団長、馬場副団長、佐々木副団長

その傷跡がまだあちこちに残っていた。

訪問した穴澗村の中等学校(11年制)は、地震で潰れたため、漁期に季節労働者が生活する寮を、教師たちが手作りで改造した仮校舎であった。教材は壊れた校舎から運びこんだもので、数学の数式が壁に張ってあったが、日本より程度の高いのに驚いた。年間の授業日数は190日で、夏休みは5月25日から9月1日までの約3カ月と長い。島内には中等学校2校、幼稚園2園がある。

周辺の家屋も倒壊したり、ひびわれたままで、アレニコワ教頭は「震災後、多くの島民が離島し、生徒がかなり減った。今は夏休みなので、この間に教職員で校舎の修理をしています」と話した。

しかし、道行く子供たちはジーンズやカラフルな衣装で明るく、素直で大事にされているのがよくわかった。訪問した幼稚園は倒壊を免れ、小さいながら充実していた。子供たちの歌とダンスが披露された。私たちも各人が思い思いに持参した折り紙や鉛筆を、一まとめにしてお土産にした。

対話集会：夕方、団員は対話集会とホームビジットの2グループに分かれた。私は集会に参加した。

場所は震災援助物資の保管のために日本が建てた『人道支援倉庫』の2階だった。ロシア人との

会話は2名の通訳を介して行われた。話題は、生活、文化を含む幅広い分野について、自由発言の形で進められた。

Q：島の経済は……。

A：水産加工業が主体だ。島の西側の水産コンビナートにある工場は4工場だが、現在稼働しているのは2工場である。斜古丹(しゃこたん)村にある私の工場は壊滅した。再建のための資金が政府からはもちろん、何処からも来ない。漁期を前にどうしようもない(斜古丹工場長)。

(根室ではロシア船がカニを水揚げし、色丹島民は日本製のパン焼き器でパンを焼いている。経済はボーダーレスに動いていると、ホームビジット組に加わった弟が見聞してきた。日本との距離が近く、物資が往来する分、この島では日本との心理的距離も近いのである)。

Q：教育の状況は……。

A：現在は仮設校舎だが、日本からの人道援助で、間もなく低学年用の校舎ができる。7月末には日本から建設隊が来てくれる(ブイコフ副地区長は笑顔を見せた)。高等教育への進学率は80%だったが、今後どうなるか。

Q：地震後の住民の流出は……。

A：住民は約30%減った。地震前、この島は豊



7月18日、色丹島での対話集会。「一緒に暮らそう」と訴える筆者に微笑みかける現島民 (写真は北海道新聞社のご好意により、1996年7月26日釧路版より転載)

かで、ロシアで最も出生率の高いところだったが、それも急速に減少した。

Q：平均月収は……。

A：150万～200万ルーブルである。(訪問時は1,000円=50,000ルーブル。ちなみに、翌日行った商店街での価格(ルーブル)は、シャンパン=35,000、ウオッカ=18,000、タマネギ=15,000/Kg、日本製缶ジュース=5,500/本。一般の衣料雑貨は円換算すると日本のスーパー並で中国製が多く、ジュース類は韓国製が多かった。一般に野菜類が高く、高級品は何でも非常に高い)。

率直な意見交換が続いた。話題が領土問題に及んでも、ロシア人は最初、冷静であった。しかし、「北方四島は沖縄と同じ、日本固有の領土である。両者の唯一の違いは、沖縄にはずっと日本人が住み、四島には住み続けていないことである」といった趣旨の発言がたあたりから、急に険悪な空気になるってしまった。

「なにが同じものか。沖縄とこの島には何の共通点もない。第一、私たちは半世紀、3代に互ってこの島に住みついているのです」と先程の工場長が顔を真っ赤にして発言した。

これは意外であった。色丹島民の多くは親日的

で、返還に柔軟な姿勢であると聞かされていたのである。日本側にとっては当然の主張で、それまでの論調を特に変えたようには思われなかったが、この変わりようは何故だろう。何処か彼らにとって誤解を招く、舌足らずの点があったのだろうか。しばらく気まずい沈黙が続いた。なんとかしなければならぬと、誰もが感じた。

私は、ふと、彼らが本当に問題にしているのは、領土ではなく、自分たちの居住権なのではないかと感じた。それなら元島民として、十分心情的に理解できる。私は思い切って手を挙げ、発言した。

「皆さん、私は、この島ではないのですが、択捉(えとろふ)島の島民でした。戦後、すぐにロシア人がやってきて、2年間、文字通り同じ屋根の下に住みました。仲良しの家族もできて、母のところにも夫婦喧嘩の仲裁まで、頼んでくるぐらい親しくなったんです」

ほう、と言う感じが場内に流れた。

「私は少しずつロシア語を覚えて、ロシア人の友達もできました。よく一緒に魚釣りにいきました。ある日、ミコヤン外相が視察にきて、その3カ月後に、突然スターリンが日本人に引き上げ命令をだしました。私たちは、祖父の代から半世紀以上住み着いた島を、泣く泣く去ることになった

んです」場内が一瞬となつた。

「島を去る日は闇夜でした。夕方から、ロシアの友人たちが、浜に焚き火をたいて見送ってくれました。私たちは、動き始めた船の甲板に群がって、たった一つの島の目印である焚き火の火を見つけていました。急に、火がにじんだように大きくなったかと思うと、不意に水平線の陰に消えました。私は今も、あの時の滲んだような火を忘れることができないんです」

通訳の、道口さんの声が急に止まった。驚いたことに、彼女は目にうっすらと涙を浮かべているのではないか（彼女は私の気持ちになって、訳してくれていたのだった）。

「私はもちろん、北方四島は日本固有の領土だと信じています。しかし、私たちのような思いで、島を去らなければならない人間が生じることは、私には耐え難いことです。私たちは、一緒に住めるはずです。一緒に住みましょう」

急に、空気が緩んで行くのを感じた。事務局の人が、潮時とみて、そろそろ時間なのでと注意した。私は、しかし、あと一言付け加えさせて欲しいと頼んだ。

「1月ほど前、私は出張でスイスに行きました。週末、仕事には関係なかったのですが、ビール／ビエンスと言う町を訪ねました。その時、島に来ることは内定していたので、その前にぜひとも見ておきたかったのです。ビールはこの町のドイツ名、ビエンスはフランス名ですが、ビール／ビエンスと併記で公式名、つまり、独仏2カ国語が公用語なんです。世界一の時計工業の町です。フランス人の独創性とデザイン、ドイツ人の理論性と職人芸が補い合い、助け合って、世界一の時計・精密工業を作り出したと、町の人が言っていました。私たちも、助け合って、いい町づくりが出来るのではないのでしょうか」

ロシア人が皆、私の方を向いて、微笑んだ。私は、ほっとした。

司会者が、ロシア人の発言をうながした。皆もじもじしていたが、やがて一人の若い婦人が、言った。

「そうね、とてもうれしい、良いお話だったわ。わたしには今、6歳の息子がいるけど、日本人のお嫁さんが来るようになったら、なんて素敵なんでしょう」

ここで時間になった。私たちは交流夕食会場に向かった。

交流夕食会：夕食会は、ロシア民謡の合唱とダンスが続き、とてもいい雰囲気になり上がった。もともと日本人もロシア人も宴会好きの民族である。歌だけでなくダンスも好きなのがちょっと日本人と違うところであろうか。食卓には、魚料理の他に、海草のサラダと漬物がでた。これは、ロシアにはなかった料理である。野菜が高いので代わりに海草を使うとのことであつた。

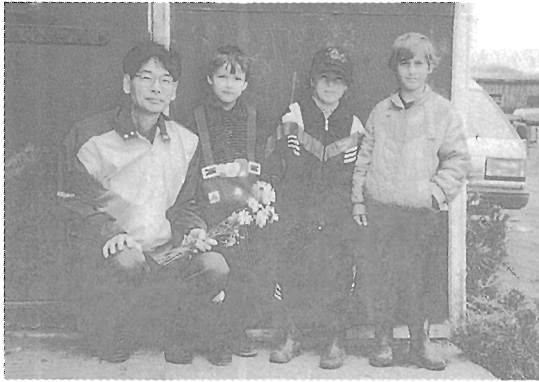
ウオッカとシャンパンがでたが、ロシアのマナーでは、一人で飲んではいけない。「何々のために」と言っただけで乾杯し、文字通り完全に杯を乾すのである。エリツイン大統領がアル中なのは、と言われる理由が分かったような気がした。

私たちは、足元を気遣いながら、船へ戻った。

人道援助：色丹島2日目の19日、訪れた北部の斜古丹村では、日本からの援助で昨年秋に診療所が建てられ、罹災した島民の健康を支えていた。内科、外科、小児科、婦人科、救急外来、レント



チャーター船「コーラルホワイト」の船内風景、毎夜食堂で1日の見聞を話し合う



野の花をプレゼントしてくれた子供たちと
(色丹島・穴澗村体育館前)

ゲン室を備えている。

各科に毎日十数人の患者が来るという。5人の医師、15人の看護婦らは「小さいが、よく整った設備で、毎日診療所に出勤するのが楽しい」と明るい表情で話した。「あとは不足しつつある包帯や使い捨ての注射器が欲しい」と要望があった。

スポーツと交流：穴澗の体育館でバスケットボール、バレーボール、卓球の交流試合を楽しんだ。名プレー、珍プレーにはどっと拍手が湧き起り、スポーツに国境なしとつくづく感じた。

訪問団員の一人で、大阪から参加した水口さんは、紙芝居を持参した。阪神大震災後、避難先となった学校や仮設住宅を訪ねては、紙芝居を上演してきた。「この島でも、被災した子供たちの心を和らげようと思って。でも、演題がこれでよかったかなあ」と水口さん。

体育館で通訳を通して、「北方の民話」「ドラえもん」などを上演した。子供たちの輪がどんどん広がった。特に「ドラえもん」の人氣が凄く、択捉島でも子供たちは同様の反応を示した。水口さんは「眼の輝きが忘れられない。持ってきて本当によかった」としみじみ語った。

全国会議の委員でもある児玉泰子さんは、笹と短冊を持参し、七夕祭りを行った。願いがかなうと聞いて、大勢の子供がロシア語で書き付けた短冊を笹一杯に吊るした。

◇択捉島訪問◇

行政幹部訪問：7月20日、私と弟は早朝から甲板に出て、49年振りの故郷の島影を見ようと待ち構えていた。船は択捉島の内岡（なよか）湾に入った。海岸線は一面の緑である。双子の山をなす散布（ちりっぷ）山頂は霧に隠れて見えない。その代わり、湾内は油風である。やがて、訪問団の受け入れを請負った地元旅行社の若い女性社長マリーナさんを乗せて大型の鯨（はしけ）がやってきた。

紗那（しゃな）村の港に下り立った訪問団を歓迎する式典で、クリル地区行政府のスペトロフ地区長は「領土返還運動は、われわれにとって心を痛める運動で、かつては緊張感があった。しかし、5年間のビザなし交流で、次第にいい雰囲気になってきたと思う」と切り出して、私たちを驚かせた。口髭をたくわえ、長身で男前の地区長はいかにもやり手という感じだった。

しかし、島の現状について「主要道路の復旧など若干の財政措置はあるものの、医療、教育、災害復旧などに対するロシア政府の対策が十分でない」と述べ、島民が安定した生活を求めて、大陸に移動していることを認めた。

誰かが「では、前回の大統領選挙で、島民はどなたに投票したのでしょうか」とたずねた。すると、大部分がエリツインに投票しました。皆、暗い共産党時代に後戻りするのを好まなかったのです」と答えた。

「でも、出て行くばかりではありません。択捉島より厳しい状況のウクライナから、建設工事などで出稼ぎに来ている人達もいます。もともと、これはブラックユーモアになってしまうんですが」と地区長は語り、「島の繁栄は、水産業を中心とした経済の活性化以外ありえない。世界的レベルの缶詰工場や水産加工場を建設中です」と述べた。

紗那の対話集会：私は集会には参加しなかった。しかし、何人かの人からその様子を聞くことがで

きた。

国内経済の混迷が続く中で、ロシア側は北方四島への外国資本導入に積極的であり、地元新聞社『赤い灯台』のシモノフ編集長は、「日本の政府は否定するが、アメリカ、オランダ、フランス、中国などの企業家が入っている」と指摘した。島民の側からは「本当に島のことを考えているなら、何故日本は投資してくれないのか」という声もあった。

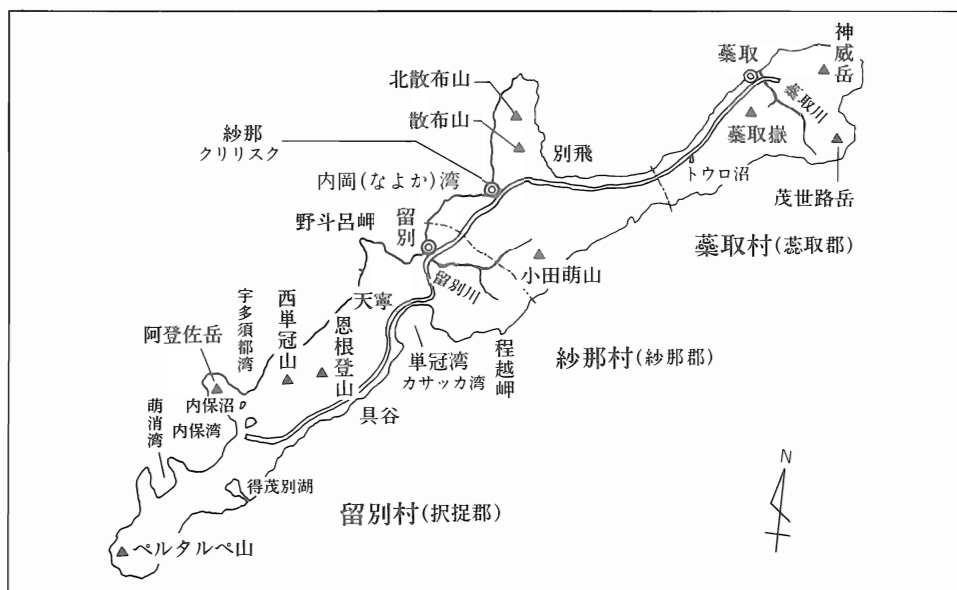
現状における北方四島との経済活動については、ロシアの国内法令に従うことをはじめ、ロシアによる島の不法占拠を容認するかのような結果になり、到底認められないとする日本側とは相い容れず、堅い空気になった。

ふるさと：色丹島から択捉島へ向かう船の中で、何人かの方々が私と弟を、なんとか故郷の留別(るべつ)村まで行かせられないかと心配して下さった。訪問地・紗那村と留別村の距離は40kmである。しかし、ビザなし訪問という団体行動の中で、私は到底無理だと思っていた。



民族衣装でパンと塩を持ち歓迎する少女
日本人は元島民・高村氏
(択捉島・紗那にて)

当日になって、上記の児玉さんが「人道支援の成果を視察するために車を出させるので、同乗しなさい。時間の許す限り行けるところまで行ってみましょう」と言う。弟と小躍りして乗り込んだ。途中、人道支援のトラクターの稼働状況と、土



えと ろふ
択 捉 島



択捉島・沙那村郊外にあるヤンキトウ海岸で見つけた旧日本時代の漁業権の原基。

鮭定置網の海への張り出しの制限長さ(びんき)が数字で示されている。(単位は尋(ひろ)か?)

地改良のための苦土石灰の使用状況を調査して、車は留別に向かった。

車中で案内役のゴミートリエフ農林課長が「留別村はかなり前に大洪水があって、村は消滅した。今は2軒の酪農家が留別沼の北側の草地で牛を飼っている」と言う。よく聞くとそれは、かつてのわが家の草刈場であった。しかし、しばらく行くと道路工事のトラクターに出会い、先日の洪水で、すぐ先の道路が遮断されていることが分かった。

やむをえず車を下りると、見覚えのある二つの山が重なった風景が目映った。懐かしかった。しばらくそこに立ち尽くした。行けない留別の、思い出の情景が次々と頭の中に浮かんで消えた。

とにかく、ここまで来れたのも人の情けである。その場で記念の写真を撮り引き返した。

元島民の高村さん(69)と妹の規子さん(60)は沙那村・別飛(べつとぶ)の出身だった。滞在最終日の21日、別飛郊外の墓地へ向かった。墓石はなかったが地形には見覚えがあった。やや平坦になった場所で、確かにここに父の墓があったはずだと、持参したコップ酒を供えた。

「今回の旅は海も凧いで、雨も降らず、親父待

ってくれたんだらうなって思ってるんですよ」

「案内に同行してくれたロシアの若い女性が、私も紗那で生まれた人間です。気持ちは分かりますって言ってね。大粒の涙を流したんだよ。いや、ロシアも日本もない、俺たち同郷人だって思ったね」と高村さんは、しみじみと話した。

ホームビジット：弟と二人、ガリーナさん(45)のアパートを訪れ、夕食をご馳走になった。娘のラリーサさん(20)とその友人イリーナさん(21)、友人のリュドミーラさん(44)、その娘イーラさん(10)がいっしょに迎えてくれた。全員女性である。

「主人は両方ともエンジニアで、現在、息子らを連れてウラジオストックへ働きに行っている。あちらには年寄りも行っているし、息子は勉学のためしばらく戻らないでしょう」とガリーナさん。

土産をだしながら「衣類です。実は妻が選んだんですが、全部女物です。なんで男物がないんだって詰問したら、女性が美しくなれば男性は満足だからって。ご主人たちによろしく」と言うのと、

「まあ、なんてあなた方は偉大なおかあちゃんを持ったんでしょ」と言って、楽しそうに笑った。

鮭のオープン焼き、キュウリ魚(シシャモに似た魚)のフライ、鶏のもも肉、自家製のパン、サ



ホームビジット(前列右この家の主婦、後列中央筆者弟)

ラミソーセージ、家庭菜園で栽培したトマト、キュウリ、ジャガイモ。食卓一杯に並んだ料理はすべて手作りだ。ウオッカとジュースも出された。

「さあ、どんどん召し上がって。ロシアの主婦は、料理の冷めないうちに食べさせたいの」と言っ

て勧めた。
ちょうどこの日、室内のテレビにはオリンピックの放送が映っていた。

「オリンピックは民族の祭典と言うけれど、島には何民族くらいいるのですか」

「そうね。ロシア、ウクライナをはじめ30民族くらいかしら」こともなげにリュドミーラさん。

「貴方がたは、何年この島に住んでいますか」

「そう、18年かしら」

「これからもずっと住むつもりですか」

「いえ、それはよくわかりません。今の状況でわね」といってガリーナさんは肩をすくめた。

魚釣り：弟は乗船の際、密かにリールの釣竿を2本忍ばせていた。「兄弟で釣り上げ、コック長に頼んで、故郷の海の魚を皆に食べさせよう」というのである。めざすは大鰯（オヒョウ、大型のカレイ）であった。早朝、内岡（なよか）湾の沖に

停泊する船の上から、釣り糸を下ろした。ところが、いくら下げても底に着かない。糸はどんどん伸びて行く。

「おかしな。ここはそんなに深かったっけ」

「馬鹿だな、兄さん。魚が持ってるんだよ」

なるほど、引き上げてみると大きなホッケだった。それからは、もう入れ食いでいろいろ釣れ、餌は底に届かないので、ついに大鰯を釣ることはできなかった。

水産加工場：別飛（べつとぶ）地区では、水産加工場が訪問団に初めて公開された。海岸に立てられた平屋の加工場は、間もなく始まるシーズンを前に、忙しく整備中であった。まだ、新しく清潔な感じがする。場長が東洋一と自負する大型冷凍施設を見た。プレハブの冷凍室がぎっしり並んでいる。プレートを見た。日本・サンヨー製であった。

「冷凍室はどのように使うのか」

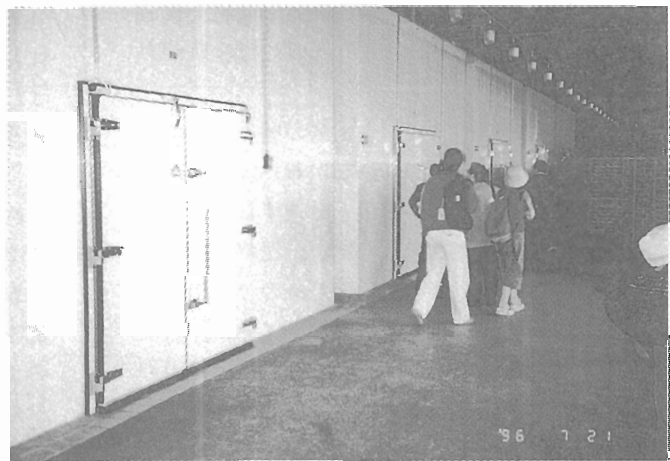
「シーズン中は、陸揚げした鮭を塩蔵するまでの、鮮度保持である。シーズン後は年間保存用に使う」

「塩蔵の塩は何処で作っているのか」

「大陸から送られてくる」



油風の択捉島内岡湾で魚を釣る。
入れ食いである



「東洋一(?)」と誇る「別飛^{べつとぶ}水産加工場」
日本サンヨー製大型冷凍庫が並ぶ

◆技術の系譜◆ —余話として—

紗那（しゃな）鮭鱒孵化場の見学は、火事があったらしく実現しなかった。私は手を挙げて質問した。

「択捉島にはかつて9カ所、国後島には5カ所の孵化場（ふかじょう）がありましたが、現在は何カ所ですか。また、孵化事業はどのように行われていますか」

水産加工場長は胸を張って答えた。

「国後島では自然にまかせているが、択捉島では2カ所で孵化事業を行っています。特に紗那の孵化場は規模も大きく、だから毎年たくさんの鮭鱒がここに戻ってくるのです」

そして、場長はこう付け加えた。

「私たちは1945年から3年がかりで日本人から孵化事業を学びました。半世紀たった今もその技術を忠実に受け継いでいるのです」

その時、私は不意に胸に込み上げて来るものを感じた。この千島で、鮭鱒孵化技術の開発と事業に心血を注ぎ、たくさんの人材を育てた、義理の伯父・石井久治の温顔が臉に浮かんだのである。

石井久治は旧村上藩、現在の新潟県村上市の「鮭の子」であった。いや、これには注釈が必要であろう。

江戸時代の鮭を語る時、鮭の歴史の長い、岩手県津軽石川（つがるいしかわ）と新潟県三面川（みおもてがわ）のことを逃すことはできない。それは、この二つの川が、江戸時代中期、それぞれ独自に、鮭を増やすための「種川（たねがわ）制度」をしていたからである。

太平洋側の津軽石川の制度は、河口周辺の沖取りの禁止と禁漁時間帯の設置により、経験的に鮭の母川回帰数を確保する制度であった。

一方、日本海側の三面川の制度は、村上藩士・青砥武平次（あおと・ぶへいじ）の建議による

もので、一口に言えば、鮭の産卵、孵化を容易にする保護河川を半人工的に設けるものであった。この制度の確立によって、江戸時代さしたる財源を持たない村上藩は、安定的収入を得ることができるようになったのである。

明治になって、鮭の漁業権は旧藩士へと移され、明治15年（1882年）村上鮭産育養所が設立された。この鮭産育養所の鮭増殖策は大成功となり、小学村上校、村上私学校をはじめ、治水事業、植林事業、製糸工場、缶詰工場、そして最後に銀行まで経営するようになる。しかし、いろいろな形での挫折が続き、新漁業法になって、三面川の独占権を手放し、その歴史を閉じた。

この間の事業のうち、最も有名なのは教育へのテコ入れと奨学資金であり、その恩恵を受けた人を「鮭の子」と呼ぶのである。

鮭の子・石井久治は当時の東北帝国大学農科大学校水産学科（北大水産学部の前身）の学生となり、米国から伝えられた鮭の孵化・放流の技術を学び、北海道庁に就職した。当時、孵化事業の重要性は認識されていなかった。鮭資源は豊富で、どうしても鮭を増殖しなければいけないという危機感がなかったことが原因であろう。

しかし、彼が若くして千島択捉島に孵化場長として赴任し、私の伯母と結婚して間もなく、記録的大不漁がやってきた。網元の倒産が相次ぎ、漁民は生活に困窮した。タラバガニ、鱈、昆布などの水産資源もあったが、鮭鱒に比べるべくもなかった。「鮭の子」として育った彼は、それが運命であるかのように、孵化事業にのめりこんでいったのである。

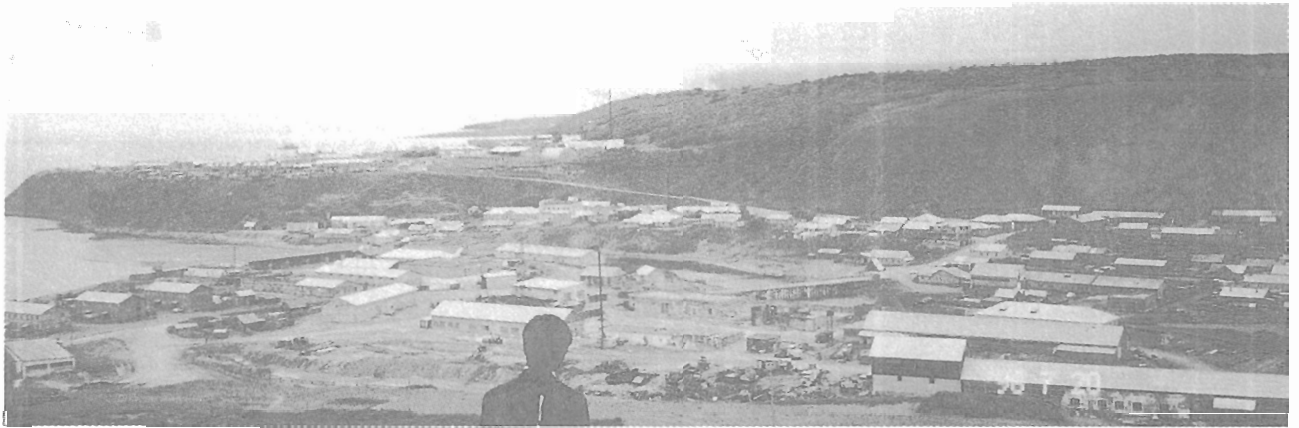
彼の行動範囲は南千島諸島に止まらなかった。北千島の一部にも、紅鮭の調査に赴き、探検家のような一面を持っていた。ソ連にもそのことは知られていたらしい。終戦時、たまたま択捉島におり、ソ連軍に孵化事業の指導を依頼された。『特殊技能者』として、一般人と同時の帰国は認められず、私たちの引き揚げ後、1年以上

たってやっと帰ることができた。

その伯父たちの技術が今も忠実に守られ、ロシア人の生活を支えているというのである。資源保護的な古来の「種川制度」と米国渡来の孵化技術を混然一体として発展させたのが伯父たちの千島流増殖技術である。種川制度の敵である密漁者について尋ねたところ、特に厳しく、

実刑が課されるとの説明があった。

もちろん、回帰率において、現在の日本の最先端の孵化増殖技術には及ばない。しかし、「海の古里」の環境収容力の限界が見えはじめ、鮭鱒の小型化が懸念される現在、回帰率第一の孵化増殖技術にも限界が見え始めた。伯父が生きていたら、何といったであろうか。



岡の上から択捉島・^{しよな}紗那市街を望む。中央を鮭が上る川が流れ、橋が見える

自然の中で：色丹島のマタコタン湾は、緑の山に囲まれた、おだやかな美しい入り江である。団員はそこで童心に戻って、水面に石を飛ばした。

択捉島、紗那から約10キロ北にあるヤンキトウの海岸は、山に向けて見渡す限り広がる草原を、オレンジ色のエゾカンゾウの大群落が埋め尽くす。

別飛地区の白砂の海岸では、ハマナスの赤い花が風に匂っていた。その中を鱒が上る川が流れ、古びた橋がかかっている。橋に連なる道の両側はセンダイハギの黄色い花の群落が続く。道は途切れ、そこからは草原が広がっている。その草原の

中に陣取り、ロシア側の計らいでウハスープ（鮭の潮汁）の会を楽しんだ。

料理を味わい、ウオッカでの乾杯を重ねながら、会話が弾む。率直な意見が交わされるようになる。地元旅行社の女性社長・マリナさんが言う。

「ビザなし交流もう5年目。毎年同じことを続けていていいのでしょうか。ロシア側からの訪問は、買い物ツアーだ、などと批判されていることも知っています。別の新しい道を、探っていくことも必要ではないでしょうか」

◇おわりに◇

ビザなし交流とは何だったのか。5年経ってそれが問われるようになった。

しかし、「ロシア人島民は、ビザなし交流で、領土問題があることを初めて理解した」のである。その意味で、この5年間の交流の意義は大きかった。むしろ問題は今後、何をするかであろう。

交流団員は、帰国後1週間以内に、感想・意見の提出を求められた。「北方領土返還実現のための今後の取り組みについて感じられたこと」という最後の記入項目に次のように記した。

「ご努力により、北方領土返還運動の理論・組織は充実してきておりますが、返還実現後、どの

ような施策が講じられるのか、プログラムは研究されておりません。これがないと、例えば返還後ロシア人はどうなるのか、といった彼らのプリミティブな質問にすら答えられません。一般論として、領土の移動は、そのままでは難民を生じさせることとなります。対話集会の今後が危惧される所以です。二、三の項目のみ上げても、漁業権、資源保護、環境保護などの施策のために、基礎データの収集が必要と思われます。返還プログラム(案)を作成するプロジェクトチームを、早急に発足させる必要があると考えます。」

古里への懐かしさだけで参加した私であったが、旅の終わりには、それだけでは済まされない心境になっていた。

(元日本たばこ産業株式会社海水総合研究所長)



素っ気ない

大野 正之

素っ気ないですね

“何か書いてみないか” 言われて軽く引き受けてしまったのは、締め切りがずっと先だったからである。頭片隅にいくばくかの引っ掛かりを残したまま、その日暮らしに過ごしていたら、いよいよ期限が間近かになってしまった。さて何を書こうか。

困った。とにかく次号送りにでもしてもらおう。縫る思いを武本（SS財団）専務理事に仄めかしてみたら、返ってきたのは素っ気ない返事。“素っ気ないですね” って言ったら、“その題いいね” ですって。そんなわけで覚悟を決して、奇妙な文題で拙文を書かせて貰うことにした。

それにしても“素っ気ない” という言葉、“素” も“気” も立派な意味をもつ文字なのに、二つが並ぶと必ず“素っ気なく” なくなってしまう。促音をとって素気（スゲ）としても、やっぱり“素気なく” なくなってしまう。どうやら“素” と“気” は二つ並ぶと、否定の用法しかないようだ。どうしてそうなるのか、哲学的でも言語学的でもなく、むしろお笑いの、できれば『そるえんす』の品

格を崩さないように考察を遊んでみたい。

さて言葉の意味を考える場合、表意文字である漢字というのは便利なもので、文字を分析すれば大抵その意味が解る。都々逸には“櫻という字を分析すれば、二階（貝）の女が気にかかる”、“戀という字を分析すれば、いとしいとしよう心” など結構知られた戯れ歌がある。古今集でも“むべ山風を嵐というらん” などと洒落ている。これらは言葉遊びであって言葉の本質に迫るといったようなものではないが、言葉の側面を衝いていて面白い。ここではもう少しだけ真面目に、言葉の分析を試みることにする。

素

“素” は元素、要素など“はじめ” “もと” の意や、簡素、素肌など“飾り気がなく白い” 様子を表している。大石内蔵助で連想される山鹿素行の名は、平素の品行を“素” でありたいと言う意であろう。五行説では東・南・西・北・中央の五方位に青・赤・白・黒・黄の五色、春・夏・秋・冬の四季と土用、木・火・金・水・土の五元素を配

置している。だから春夏秋冬は色を伴って、青春、朱(=赤)夏、白秋、玄(=黒)冬となる。詩人北原白秋の名はここからとられていることはよく知られている。

“素”は白を意味するから素秋も白秋と同様に秋の別称である。色を伴った季節表現のうち、現在でも日常的に使われるのは青春ぐらいであろう。意味はすっかり変わっていて“青春とは春のことである”と言う訳にはいかない。

また四方位には青竜、朱雀、白虎、玄武の四神が配されている。玄武の玄は黒であり、暗く奥深いことを意味する。素人と書いてシロウト、玄人と書いてクロウトと読むのは、素と玄の色からきているのであろう。素人は未熟な者、玄人は熟達した専門家を意味するから、玄人のほうが優れていることになる。

しかし物事に通じることを事に明るい、通じていないことを事に暗いと言うから、色のイメージからすれば事に明るいのはシロウトのほうではないか、子供のころに抱いた疑問であった。シロの表面乱反射による明るさに比べ、クロは全てを吸収する奥の深い暗さであって、やはり奥義を極めるには深く暗い道を通り抜けなければならない、ということになるらしい。とは言え、シロも捨てたものではない。

“素”の文字は繭からつむぎだしたばかりの白糸を意味していると言うから、純白なキャンパスのように将来に多大な可能性を秘めていると解せるのである。玄人が陥りやすい狭小で独善的な常識から免れることができる。ただ残念ながら可能性だけで終わってしまうことが多いのだが。

神道では地鎮祭の時に、東南西北の方位に塩を撒いて土地を清める儀式がある。余談だが、塩を撒くかわりに、塩で型どった四神を四方位に置いて清めの儀式を行っている神社が神奈川県に一家だけある。その四神を作っている会社が、製塩業界が共同出資でつくった(株)マリン・テックという人工海水の素など塩関連商品の販売をしている会社である。全国的儀式に塩の四神が普及し、古来からの塩の文化が見直される切っ掛けにでもな

ればさいわいである。

気

この数年、書店に行くと気功に関する本が入り口付近に平積みされていた。この平積み本というのは重ね置きしてある本のことで、ベストセラー本のように人気があってよく売れる本をこの方法で陳列するそうだ。気功は気のエネルギーで病を治したり、手を触れずに人を倒すことができるという。そんな技術あるいは能力が身につくとしたら素晴らしいことだ。と言うわけでこの種の本が売れている。

話は気である。漢和辞典によれば部首の気は沸き上がる雲の象形であって、天地の間を充たし、自然現象や生命などの元という意味があるそうだ。気という字の読み方はキとケぐらいだが、その持つ意味は次のように大変多くかつ深いものがある。

①天地の間を充たすから空気・大気、②それが動き変化するから雲気・水蒸気、③天地間の自然現象・天気、④万物生成の根元力・身体の根元となる活動力：元気、⑤ちから・いきおい：活気、⑥きだて・ころもち：心気、⑦うまれつき・もちまえ：気質、⑧宇宙の万物を生成する質料：朱子学において万物を生成する形而下のもの、⑨におい・かおり、⑩息、⑪おもむき・感じ、⑫気候・季節。

こんなに多くの意味を持つ“気”という言葉、恐らく外国人にとって最も理解しがたい言葉の一つであろう。意味のうちでは、空気のように実在するものは理解しやすいはずだが、それでも眼に見えない空気存在を認識することは、そんなに容易ではなかった。

古代ギリシャの時代、万物の始原物質について水だ、土だ、風だ、火だ、あるいは土水風火の四

元素だと多くの説が出されたが、空気という説は出なかった。空気は風としてしか認識されなかった。前出の五行説でも木火土金水の五元素であって、空気はない。むしろ空間は無=真空なのか、それとも物質で満たされているのか、科学史上の重要な問題になって行くのである。

こんな具合だから、まして万物生成の根元力・身体の根元となる活動力などとなると、ますます訳が分からなくなる。根元力・活動力であるからエネルギー・パワーであることは間違いない。元気の“元”は“もと、はじめ”の意味だから、元気とは本来持っている気の力を発揮できている状態と解せる。問題はそんな力が人間に本来的に備わっているのかということだ。

病は気からという。病気とは気を病むと書く。栄養学が盛んだから、タンパク質がどうだ、ビタミンがどうだと議論されるが、肉を食ったからといっていい仕事ができるのか、野菜を食ったら立派な人間になれるのか。大事なのは気合だと、勝海舟の言である。“気”を見直すことは“自己”を見直すことでもある。自己の本来的にもつ人間力を呼び覚ますことである。以上が漢和辞典から読んだ“気”である。“気”に関する成書は多い。残念ながら私は読んだことがない。

素っ気ない

“素”も“気”も立派な意味を持つ。その二つとも無いのだから、“素っ気ない”という言葉、良い意味には使われぬ。明解国語辞典によれば“素っ気”を“そのものを思わせる何ほどの要素(におい)”としている。この“要素”にあたるのが“素”であり、“におい”にあたるのが“気(気配・気味などと使われる場合の語感)”であろう。“素っ気”までは好ましくないことを表す意味はない。

しかし用法として“素っ気ない”があり、“そのものに対する関心や暖かみを全く欠く様子を表す

形容詞”としている。促音を除いた“素気(スゲ)ない”は“つれない・薄情だ”と語意解説されているが意味は同じだ。

では何故否定語としか結合しないのか。何故無いが有って、有るが無いのか。有ると無いでは大違い。瓜に爪あり、爪に爪なしである。ここからは言語学者に任せて、おあとがよろしいようで……と行きたいところであるが、それではあまりに“素っ気ない”ということ、素人探偵の犯人捜しにお付き合いいただきたい。

第一の仮説は“素”犯人説である。“素”には“卑しい”とか“実質が伴わない”など、好ましくない意味がある。この意味のゆえに否定語とくっついてしまった可能性である。しかし否定的意味を否定すれば肯定的意味になるはずだから、この仮説は棄却される。

第二の仮説は“気”犯人説である。“気がない”という言葉があるが、うしろに返事と付ければ分かるように、“素っ気ない”と意味が近似している。そこで“気”犯人説の可能性は高くなる。しかしこの場合、“気”は名詞だから“気がある”という言葉も成り立ってしまう。やっぱり否定語としか結合しないことの説明にはならない。

第三の仮説は“気(ケ)”犯人説である。ケという読み方の熟語には山気、俗気、毒気など好ましくない意味の言葉が多い。程度の差はあれ脚気、惚気、湿気なども無いほうが良い。ところが“素っ気”や“素気(スゲ)”には好ましくないような意味はない。そこでケ読みの言葉と同族にするために、否定の用法だけが許されたのではないか。犯人はケ読みの“気”、これが結論である。

素っ気ないことの功罪

“素っ気ない”ことを好ましくない態度として話を進めてきた。しかし本当にそうだろうか。時として素っ気なくされる方が良い場合もあるので

はないか。素っ気ない態度をとる方も、たいした意図は無い。素っ気ない言葉には柔らかい壁があるだけだ。ベタベタした慣れ合いを拒否しているだけなのだ。もちろん意地悪かったり、悪意を伴うのは困る。完全に無視されるのも応える。いじめは悪意に満ちた笑いや無視から始まることが多い。

プラトンは教育とは教えないことだと言ったという。あまり教え過ぎると、自分で学ぶ力が育たなくなってしまう。素っ気ないほうが良い場合だってある。

マスコミからは仕事柄塩の味についてよく聞か

れる。塩の種類によって味がどう違うのか、おいしい塩はどれか、と。そういう場合、味の良否は個人差があるからと繰り返してきた。何度も同じ返事をしていると、素っ気ない返事をしているような気分になってくる。本当は塩の味の良否なんかよりも「塩のおいしい食べ方」を教えてあげたい。「肉汁滴る熱々のステーキをかけて食べれば良い」と。素っ気ないだろうか。

(日本たばこ産業(株)塩専売事業本部塩技術調査室長)

参考文献：明解国語辞典 三省堂
漢語林 大修館書店



校歌と久米通賢と塩田小唄と

——遠き日の思い出——

中村和市

わが国の塩専売制度は明治38年に施行されて以来、91年に及ぶ歴史にピリオドが打たれようしております。私も一時期、塩の業務に携わった者として、感慨深いものがありますが、それはともかくとして、遠き日の塩の思い出を2、3書いてみたいと思います。



校歌

小学校、といっても当時は国民学校といっておりましたが、音楽の時間になると、必ず歌う歌がありました。その歌は、「日本一の製塩地 ここ坂出の中央に 学びの庭をふみしめて 励むも楽し わらわどち」で始まる校歌で、先生から、おだてられたり叱られたりしながら、歌の意味も分からないまま、何度も何度も繰り返し歌ったものです。

この校歌は、昭和9年に坂出中央国民学校が制定したもので、そのなかに“製塩地”という塩に関係した言葉が出てきますが、これは恐らく全国広しといえども、他に例がないのではないかと思います。

当時、音楽の先生は女の先生で、いくら熱心に教えてもらっても、私達の歌が上達しないので、

ある日、教壇の上で先生を泣かせるはめになってしまった。余程、私達のできが悪かったのだと思います。あの時の先生の泣く姿を、今も鮮明に覚えております。ちなみに、先生を泣かせた2番、3番を紹介します。

作詩 堀沢周安

作曲 杉江 秀

- 2 君がみ歌に名も高き
讃岐の富士を近く見て
誠の道を勇み行く
我ら少年身はつよし
- 3 瀬戸の内海朗らかに
清きをおのが心にて
希望の光めざしつづ
たえず進まんもろともに



久米通賢

坂出市発行の市勢要覧によると、「塩の町・坂出は、慶長7年（1602年）播州赤穂の移民が角山山

麓に塩田を築いたのが始まりで、その後、天明7年(1787年)に宮武清八が御供所沖に新田を開いてから移民者が増加。文政12年(1829年)に久米栄左衛門通賢(以下、久米通賢と略称します)が登場し、坂出を塩の都として栄える基礎を築いた」とあります。

この市勢要覧に出てきます久米通賢は、社会科の時間に、先生からよく話を聞かされたものです。当時、私達は久米通賢のことを“栄チャン 栄チャン”と親しみをこめて呼んでおりましたが、その栄チャンの銅像が、学校のグラウンドのすぐ近くの松林の中にあり、帰宅のベルが鳴ると、殆ど毎日といっていいほど、そこに行つては友達と一緒に遊んだものです。

現在、久米通賢の銅像は、青い海に架かる瀬戸大橋や番の州工業地帯が一望できる聖通寺山中腹に立っているということですが、その銅像をまだ見たことがありません。いつか帰省した折りにでも、ぜひ訪ねてみたいと思っております。

久米通賢については、後年、知ったことですが、高松藩の財政を救うため、坂出塩田造成を藩に上申した際、その前文に「…もし見間違いご座そうろう節は、一命を差し出し、如何ようの死罪おおせつけられそうらえども、いっこう迷惑申すまじく…」と書いて、私財全部を投げ出し、自らも素足で工事の指揮をし、心血を注いだといひます。それにひきかえ、昨今の公務員は、公費乱用で世間の強い批判にさらされておりますが、天国にいる久米通賢は、どんな思いで下界の出来事をみておられるのでしょうか。



塩田小唄

過日、本の整理をしていたら、本の間から二つ折りになった「塩田小唄」の歌詞と楽譜が出てきた。早速、娘にピアノで弾いてもらったら、昔、塩の試験室で先輩のAさんから教えてもらったリズムやテンポと殆ど変わらないことが分かり、さすが先輩だけのことはあると感心しました。いつ

かAさんにお会いする機会があったら、酒でも酌み交わしながら、自信?のついた歌と一緒に歌ってみたいものと思っております。

この塩田小唄を振付した中山義夫氏の記述によると、「塩田小唄は、香川県の坂出市を中心とした地方に歌われる新民謡であります。波静かな瀬戸内の海岸に整然と区画された塩田風景は、数多くの小島を浮かべて、絵のように美しい瀬戸内海の風光に一つの詩情を加えるものでありましょう。焼けつく太陽の下に、広い塩田をマンガ(砂をかく熊手のようなもの)をかついで、ひた走りに駆ける浜師達のたくましい筋肉は汗に光り、ロダンの彫刻にも似た男性美をあますところなく表現し、生きるよろこびにあふれた、その力強い動作は、見る人々に共感を呼びおこすものであります」これを読むと、少年のころが、昨日のように鮮やかに蘇ってくるのを覚えます。

この塩田小唄は、坂出市が制定したもので、ご存じの方もいるかと思いますが、以下、歌詞を紹介いたします。

塩田小唄 月 ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪

作詩 荒井清児
作曲 佐々紅華
唄 二村定一

演奏 ビクター・オーケストラ

- | | |
|---------------------------|---------------------|
| 1 俺は讃岐で
黒い毛脛は
親ゆずり | 塩浜かせぎ

親ゆずり |
| 2 雨よ降るなよ
塩田浜師の
俺も泣く | 子持ちが泣くよ

俺も泣く |

3 砂は焦げ砂 そうよ熱の砂
俺も素足で
歳とった 歳とった

4 浜は照れ照れ 浜師は走れ
日かな一日
照れ走れ 照れ走れ

母校の校歌は、現在も子供たちに歌いつがれており、また久米通賢も塩の都を築いた恩人として、かつて塩田があった市街地を見下ろせる山中で、大勢の人々が訪れる場所の一つになっているようですが、塩田小唄については、地元の人でさえ殆ど知らない人が多いということです。

寂しい限りですが、塩田を知る者の一人として、この歌をいつまでも我が心の歌として、歌い続けたいと思っております。

(前日本たばこ産業株式会社知的財産部調査役)

塩 田 小 唄

是 井 樹 兒 詩
佐 々 木 昭 典

おれ - は じつ - に さで

しあ は まー かせー ぞ

- くろー い はざー おー は

お や りー り お や りー り

27

塩漫筆

塩車

米 塩

日本列島の住民は、弥生時代以来の稲作米食民族である。江戸時代には大名の所領は何万石、武士の禄高は何百石と米を単位として定められ、米は食料であるばかりか経済社会の基本となっていた。

「それじゃあ、めしの食い上げよお」は（生活して行けない）であり、「食って行けねえ」の食いは（お飯、米）である。ところが実際には、米だけでは生きて行けないことは昔の人も身体で知っていた。必要最低限の生活費のことを「米塩の資」といい、米の他に塩が要るのである。白米のおにぎりに塩気は欠かせない。米と塩さえあれば当面生きていけるということであった。

米・麦のような植物性食物を多食すると体内のナトリウムNaが不足し、これを補うため生理的、本能的にNa分を多く含むものが食べたくなる。一番身近にある高Naのものは塩であり、ここから人類の塩味嗜好が習性となり、やがて塩は調味料の第一として人間社会に定着した。米食民族ならずとも、今や塩抜き^{塩抜き}の食生活は考えられない。

ここで小野田さんに登場していただく。半世紀前の太平洋戦争以後30年間、フィリピンのルバング島に残留し活動していた、あの小野田寛郎少尉である。先頃、東京新聞（平成7年4月）が『この道』と題した小野田さんの手記を連載していた。これによると、ルバング島での生活は米を中心とした食料を山野、田畑あるいは農家から徴発（もちろん、だまって頂いてくる）したという。塩については次のように記述している。

〔人間は水と塩があれば、最低限生きる条件が整っているような気がする。〕

私たちは塩を“魔法薬”と呼んでいた。「きょうは寒いから、ひとつ魔法薬でも使うか」と、食事にほんのひとつまみの塩を入れる。それだけで味が違い、体力が回復した。最初のうちは西海岸の岩の間で見つけたニガリの強い天然の塩でがまんしていたが、小塚一等兵と二人になって積極的なゲリラ作戦をやるようになってからは、テリックやロックにある住民の塩田に出かけて、必要量だけ頂戴した。二人で年に一升もあれば十分だった。…（平成7年4月18日版）

極限の生活における塩の効用をこのように語っている。「二人で年に一升」として計算してみると、1人当たり年間で約1.1kg、1日平均ではちょうど3.0gとなる。

戦後50年の現在、あの食料難、塩飢饉はすっかり過去のこととなり、今や飽食・グルメの時代である。そうしてノンカロリー食品、減塩等が世の風潮となっている。健康問題でコメントを求められ、話の終りに「塩分を控え目に」とつけければ一応格好がつく。また食品売場の塩鮭も、「奥さん、これ甘塩だよ！」といえ^{あまじお}ば一段とよく売れるという。

われわれは、日常体内のNa不足量を計算して塩を摂っているわけではない。食物をおいしく食べるために、塩で調味調理している。人の身体は良

くしたもので、余分の塩分は小便として体外へ排出し、体液の塩分濃度は常に一定に保たれている。人体内に取り込まれる塩分量は僅かであり、口から摂取した塩分のほとんどが排出される。研究者が人の塩分摂取量を調べる際、1日分の尿を採り、これに含まれている塩分量を測って摂取量としている。このことからわかるように、人体が正常であれば、口から入った塩分の大部分は余剰なものとして尿に排出されるだけである。

人体内のミネラル・バランスを考える場合、問題になるのは塩 (NaCl) ではなくNaである。Naは一般の植物性食品にはほとんど含まれておらず、動物性食品と海藻類に含まれている。食べものによって、体内に入るNa量は大きく差があり、食習慣が違えば塩分摂取量の規準も変わってくる。また、炎天で汗を流して働く労働者と、クーラーが効いた室内に坐す者とは、塩分の必要量は大きい、塩分摂取量は1日何グラムと簡単には決められない問題であろう。生理学的な必要摂取量とい

うのであれば、酒も砂糖も口に入れる必要がなくゼロである。塩は人体に必要なミネラルであるが、日常の食生活ではあくまでも調味料の一つに過ぎない。

減塩運動の発端となったのは、1960年アメリカのダールが発表した「食塩摂取量と高血圧症との疫学的研究」である。以来、塩分の過剰摂取の害を強調する学者が多く、「減塩」が世の風潮となった。そうして塩分摂取量の統計がとられ、「1日10グラム以下が望ましい」という厚生省の御墨付まで出ている。塩と高血圧との関係は、多くの専門家が調査研究されているが、「或る量以上に塩を食べると高血圧症になるのか」、また「塩の摂取を減らせば血圧は降るのか」、この根本的な問いに対しても明快な答えは未だ聞かされてない。

食品中の発がん性成分についても同じであるが、ある食品に偏って多食するのが問題であり、多種多様な食材を、ほどほどに調味して美味しく食べればよいのではなかろうか。

平成9年度助成研究を募集

財ソルト・サイエンス研究財団では、平成9年度助成研究の公募を次のとおり行います。

〔助成の対象〕 海水濃縮プロセス、食塩結晶の製造および加工、海水資源の利用および環境問題、食塩やミネラルの生理作用、および食品における塩の用法や役割などに関連する研究を助成します。とくに若手研究者の積極的な応募を期待しています。

〔助成期間〕 平成9年4月1日～平成10年3月31日

〔助成件数〕 50件程度

〔助成金額〕 1件当たり50～300万円以下

〔応募の方法〕 当財団の応募要領による。

申請書類用紙を電話・FAX・郵便で当財団に請求して下さい。

〔申込期間〕 平成8年11月1日～平成9年1月10日（申請書類必着）

〔申込先〕 〒106 東京都港区六本木7-15-14 塩業ビル3F

財ソルト・サイエンス研究財団

電話 03-3497-5711 FAX 03-3497-5712

第38回海水技術研修会の案内

ソルト・サイエンス研究財団が共催する第38回海水技術研修会（主催：日本海水学会、共催：日本塩工業会、造水促進センター、ソルト・サイエンス研究財団、日本たばこ産業（株）および塩事業センター）が次のとおり開催されます。



日 時	平成9年2月20日(木) 13:00～17:00	プログラム (予定) 2月20日(木)
	2月21日(金) 9:00～15:00	
会 場	箱根観光会館	・ 挨拶 (13:00～13:10)
	神奈川県箱根町湯本743	日本海水学会会長 堀部純男
交 通	TEL 0460-5-5728	・ 製造業におけるISO 9000認証取得について
	小田急・箱根登山鉄道 箱根湯本駅下車 徒歩10分	(13:10～15:00) (財)日本品質保証機構 作本裕之

- ・溶液組成測定システムの開発（測定原理と製塩工程への適用）（15：10～17：00）
（財）塩事業センター 吉川直人
 - ・懇親会（17：10～19：00）
- 2月21日（金）
- ・せんごう缶内の溶液平衡（9：00～10：30）
新日本ソルト(株)江原 亮
 - ・新しい塩事業制度と今後の塩業の展開
（10：40～12：10）
日本たばこ産業(株) 楠目 齊

- ・FRP 複合材料の耐食分野への応用
（13：10～15：00）
旭硝子マテックス(株) 影山弘史
- 定 員 100名（定員になり次第締め切ります）
- 締 切 平成9年1月24日
- 申 込 先 日本海水学会
〒106 東京都港区六本木7-15-14
TEL 03-3402-6414、FAX 03-3402-6416

「塩の機能とその科学」講演会が開催される

塩に関する正しい知識の普及を主旨とする標記の講演会（主催：日本海水学会）が、去る10月26日、仙台市の宮城県建設産業会館において開催されました。

同講演会は東京、大阪に次いで仙台が3回目。近年、塩と健康に関する社会的関心の高まりもあって、東北地域の栄養士、大学や塩業関係者が多

数参加されて盛会裡に終了しました。

ちなみに、共催は日本栄養改善学会、日本食品科学工学会、日本家政学会、日本栄養士会、日本水産学会、日本調理科学会、日本伝統食品研究会、後援はソルト・サイエンス研究財団と塩事業センターです。



財団だより

1. 平成9年度助成研究の募集

平成9年度助成研究を本年11月1日(水)から平成9年1月10日(金)まで募集しております。(募集要項は関係学会誌、月刊ソルト・サイエンス情報および本誌32頁に掲載)

2. 「塩の機能とその科学—食と健康を考える—」講演会(平成8年10月26日(土))

宮城県建設産業会館)

標記講演会が日本海水学会の主催、日本栄養改善学会、日本食品科学工学会、日本家政学会、日本栄養士会、日本水産学会、日本調理科学会および日本伝統食品研究会の共催、ソルト・サイエンス研究財団および塩事業センターの後援により開催されました。

(予定)

・第38回海水技術研修会(平成9年2月20日~21日(木、金))

標記研修会が日本海水学会の主催、日本塩工業会、造水促進センター、ソルト・サイエンス研究財団、日本たばこ産業(株)および塩事業センターの共催により、箱根町「箱根観光会館」で開催されます。

・第18回研究運営審議会(平成9年2月19日(水)虎ノ門パストラル予定)

平成9年度の研究助成の選考が行われる予定です。

・第18回評議員会、第19回理事会(平成9年3月14日(金)東京プリンスホテル予定)

平成9年度の事業計画および収支予算などが審議される予定です。

編集後記

今年の秋、私用で故郷大分へ帰省の折りに、義弟の車に便乗し長崎まで旅行する機会がありました。

最近の現地道路事情を知らない私には、いくつもの盆地や高原を突き抜ける九州横断には随分時間がかかるものとの強い思い込みがありました。ところが近年、高速道路が開通し長崎まで僅か3時間、距離感が一気に縮まり交通の便の良さにただただ驚かされました。しかも、車窓から眺める紅葉の山々、波打つ枯れすすきの高原、お陰で大自然の景観を満喫することができました。

モータリゼーションの進む現代、環境破壊や公害などの難問を抱えながらも地方の道路が着々と整備されている姿を目にし、時代の変化をつくづく感じさせられた旅でした。

今年も小誌に対して、皆様からの暖かいご支援をたくさんいただきました。心から感謝申し上げます。

皆様からのご意見・ご要望と積極的なご投稿をお待ちしております。

|そるえんす|

(SAL'ENCE)

第 31 号

発行日 平成 8 年 12 月 31 日

発 行

財団法人ソルト・サイエンス研究財団

(The Salt Science

Research Foundation)

〒106 東京都港区六本木 7-15-14

塩業ビル

電 話 03-3497-5711

F A X 03-3497-5712